

Title	G. -H. Bousquet "Les Bases du Systme Économique" Paris 1932.
Sub Title	
Author	小高, 泰雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.7 (1932. 7) ,p.1266(146)- 1274(154)
JaLC DOI	10.14991/001.19320701-0146
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320701-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

G.-H. Bousquet "Les Bases du Système
Économique" Paris 1932.

小 高 泰 雄

本書は近來佛蘭西經濟學界に於いて精彩を放つてゐるブスケ教授が其の *Institutes de Science Économique* の第二卷として公にしたものである。第一卷は *Introduction à la Science Économique* の表題の下に一九三〇年巴里に於いて刊行せられた。著者の經濟學上の全體系を構成すべきこの *Institutes* は數理派經濟學或はロオザンヌ經濟學に残されたる重要な一の問題即ち理論と事實との關係に對する研究を完成せんとする豫圖の許に著手せられたものである。即ち著書はワルラスによつて稍、完成せられたる數學的抽象的研究が、其の後繼者殊にパレトオの如きに於いても依然として形式的抽象的に取扱はれてゐる事實をパンタレオニと共に「そはも早一の限界に到達してゐる。これ以上押進めても科學に貢獻する所は殆んどない。」(*Introduction*. 二五四頁)として慨嘆すると共に他面數學を用ひざる文章經濟學が (*l'économie "littéraire"*) が齎したる顯著なる結果に想到し、殊に歴史學派は經濟組織の發展に關する吾人の認識を深化し完成せしめたるを認め、茲に於いて「今日近世社會に關する如何なる經濟理論の探求に當つても、其の理論は靜態的觀點よりしたる動態的現實を論述するものたることを忘れてはならぬ」(*Introduc-*

tion. Préface. XI) と謂ふ見地に到達したのであつて、これが「演繹理論に對して現實を適應せん」とする目的を以て本書が上梓せられた所以である。

著者は第一卷 *Introduction* の第一編を經濟學上の一般的問題の検討に捧げたる後第二編に於て經濟生活の全體的構造をワルラスの經濟的均衡理論を基礎として鑽攻した。彼は經濟組織發達の階級を財貨交換の立場からして *catallactiques* と *catalactiques* となし前者に於ては自然經濟及び貨幣が原則として價值尺度としてのみ代用したる時代を意味し、後者は交換の全面的擴大によつて個人或は團體の欲望の満足せられる時代を意味せしめる。そして後者の代表的形態を世界經濟に見出し、其の諸特徴を探及したる後これを基底として經濟的均衡の循環を考察する。然してこの均衡理論は諸種の假定的條件の許に想定せられた靜態社會を對象として構成せられたものであるが彼は之を以つて満足してゐない。即ち均衡理論は經濟組織を構成する諸要素の一般的相互依存關係の理論として解釋すべきであつて (*Introduction*. 一三三頁) 之等の要素の量的發展はヘーゲルに隨つて均衡の質的變化を生ずべきであるとなす。この事實はワルラスに於いて看過せられた所である。否不必要とせられた所である。何となれば彼に於ては、與件の變動は均衡の量的變動を伴ふに止つて質的變動は何等生ずるものではないとせられてゐるが故に。斯くの如く均衡理論そのものに對する兩者の見解の根本的相違はブスケ教授をして先師ワルラスの許に於いては與件として假定せられてゐる諸要素即ち人口・技術・自然的環境・民族・法制等の發展は如何なる法制に則るものであるか、經濟組織と如何なる關係を有するものであるかを考察せしむる起點となつたのであつて、この考察の結果は以下に述べんとする第二卷即ち *Les Bases du Système Économique* に纏められたのである。

第二卷の最初の二章に於いて著者が取扱つてゐるのは自然的環境並びに民族と經濟組織との關係である。著者は

此等の章に於いて經濟組織の自然的及び民族的均衡を論述し様と意圖したのであるが、其の目的は充分には果されなかつた。著者は自然的環境並びに民族と經濟組織との間の相互依存關係の存すること、其の關係の生じ来る一般的態様とを指示するに止つて、これを一の法則に迄推究し得なかつた。しかし問題そのものの性質上これを法則化することは頗る困難であつて、或は不可能であるかとさへ考へられる。この種の問題に對しては既にブハリン「唯物史觀」中に染手せられてゐるのを見るが本書はこれに比すれば遙に系統的説述たるを失はない。

自然的環境を構成する諸要素を其の固局的局面に於て考察するとそれ等の要素即ち海陸の分布・氣候の狀態・地殼の形狀・動植物の分布狀態等は經濟組織の作用する一般的條件と人間の欲望並びに人間の充用する資源を決定する。(二九—三〇頁)然し乍ら其の影響は個別的ではなくして結合的結果となつて生じ来るものであつて、又間接的にも作用する。次に諸要素を其の變動の局面に於いて考察すると一、漸次的持續的變動二、循環的變動三、突然的變動が考へ得られる。循環的變動は所謂季節的變動を包含するものであつて、そは他の二者に比して遙に重大なる影響を與へる。しかし自然の經濟組織に及ぼす作用は技術發達の程度によつて制約せられる。(三七頁)翻つて人間活動は自然的環境に對して如何に働きかけるか。其の態様は「破壞經濟」と「順應經濟」とに區別せられて考察し得る。鑛山の如く自然に償補せらるゝところのない資源力に對する人間の破壞作業は、資本の一定なることが假定せられてゐるワルラスの數學的均衡論とは時間的要素を介する時直ちに承服し得ざるものたらしめる。(四一—四二頁)「順應經濟」はより積極的局面を有する。浚渫・灌漑・孔道開鑿・植林・飼育等によつて地表や動植物分布等の自然的環境を變化する。民族と經濟組織とは相互依存の關係を有するが後者はより積極的作用をなす。一定條件の許に於ける勞働の質的相異や智的能力の相異には人種的差異が認められ従つて遺傳的傾向を有するけれ共、より廣汎なる人

間の心理的活動的の諸局面は歴史的社會的諸要素によつて構成せられこれと共に變化するのである。

第三章「經濟社會の社會的均衡」は著書の哲學的思索を表明したものであつて、従つて問題取扱上の一般的態度を指示するものである。著者は先づ經濟社會と經濟社會が作用する環境との關係如何と謂ふ中心的課題の上に古典學派並にマルクス及びパレトを檢討する。古典學派は此の問題を閉却するか或は其の重要性を誤認した。彼等のあるものは部分を以つて全體を押し、經濟學を以つて社會學の全體を構成するものであると考へた。經濟學は科學たるのみならず技術であり啓示であつた。彼等の志嚮は自由競争制度の建設であり維持であつた。他の一切の經濟的社會的動向は異端視された。然しながら、經濟制度と社會的環境との獨立性は彼等の間に潜在的に確認せられてゐたことは重視すべきである。(五八—五九頁)斯くの如き見解は社會形態學の方面より見るも「社會實體(Substrat social)」を構成する個人精神の局面より見るも認容し得ざるものである。(六〇—六一頁)これに對し明晰・深遠なるマルクスの唯物史觀は經濟制度と社會環境との間に橋梁を架したもので社會科學の發展に致命傷たる「原理」や「理念」を以てする社會形態論・發展論を打破する上に偉大な功績を樹たものである。併し著者は唯物史觀を其のまゝ受け入れるものではない。マルクスによれば直接生産者と生産手段所有者との關係——それは如何なる場合に於ても當然一定の發展段階に達したる勞働の方法及び條件に、從て社會的生產力に適應する——ここに全社會的構成の「深遠なる」秘密が存してゐる。此の經濟的基礎は其の一般的特質を變化することなくして具體的現象に多様と無限の階調を呈せしむることを妨げない。斯くの如き變化は自然的環境・民族・歴史的事件に基づくものである。さればこれ等「經驗的」與件を研究することなくして此變化を理解することは出来ない。故に社會を決定する深遠な事實は經濟にある。社會は經濟の函數である。此の事實は若し自然の環境とか民族を變化しないものとすれば理解され

る。若し之等の要素が變化する時は社會も亦變化する。經濟は「深遠なる」秘密であつて其の他の要素は「經驗的」與件である。之等の形容詞は重大な意味を持つてゐないからして社會は自然的環境の函數であり、民族の函數であつて、然も其の作用には社會の經濟的狀態を考慮を要するとするドウモランやラブゲの非難的批評を受け入れねばならぬこととなる。故に社會は經濟・自然・民族等の函數(S. E. N. R.)となすのがより眞實を傳うる所以であるとする。(七三―七五頁)更に著者は經濟が他の社會的諸構造を決定する所の命題に對して美術や法制の方面に於ける反抗を點描したる後、宗教的心理と經濟的心理とが緊密の關係にある事を特に切言し、宗教による特定商品の消費の命令・禁止、及或る種の行動(微利の如き)や特定日の勞働の禁止・命令や宗教施設の經濟的局面の重要性が如何に經濟組織の上に重大な影響を與うるべきかを縷述してゐる。

著者は斯くの如き見地よりして經濟と其の他の社會諸現象間の相互依存關係を主張するパレトオの理論を讃仰する事に至つた。パレトオは其の *Le Traité de Sociologie* に於いて謂ふ「今や科學の進歩はA(經濟狀態)B(非經濟狀態)の依存關係を明にしたからして、如何なる經濟學者も此の關係に對する無關心を固執することを許されぬ。……我々は社會の錯雜した現象をA・Bの相互依存關係を其の眞實の形式に於いて把持して研究すべきである。史的唯物論者はA・Bの依存關係を明にする上に大なる寄與をなしたものであるがこれ以上には出でなかつた。併しこれを以つて毫も非難せらるべきではない。A・B間の眞の依存關係を明にするが爲めには斯くの如き關係を明にすることが必要だからである。今や社會は相互に制約する各種の現象によつて成形せられる。總ゆる種類の現象に對して「環境」は他の總ての種類のものによつて構成せられる。この相互依存の關係の性質の研究は一般社會學に屬する問題である。(七八―八三頁)

然らば「經濟組織と國家・法制」との關係如何。經濟組織の政治的均衡に對して國家は社會的經濟的生活の一般的條件を確定し、企業家として消費者として、更に獨占的形式に於て或は自由競争の原則に據つて經濟的活動を行ふこと及び個人の經濟活動を支配すべき法規の制定を行ふ事によつて重大なる役割を受持つてゐる。然らば、國家によつて制定せられる法規全體として見た法律的・政治的環境と經濟とを結合せしむる結帶の性質如何と謂ふに(一)個々の法律規定の多數は具體的經濟的均衡に對して顯著なる影響を與へるが(二)社會的殊に經濟的進歩は立法上の一般的特質を決定する。

前者に就いて一例を求むるならば、ピール條令は直接には英蘭銀行の利益保護を目的としたに拘らず、此の法制それ自體が中央銀行の地位の變動を通じて經濟的均衡を如何に變動せしめたか。企業の集中に於いても、更に又小切手の使用に關する法規の如きに就ても考へ得られる。後者に就て見るならば彼の十二銅表に於いて債權債務に關する規定が全く重要視せられざるに對し土地所有權が微細なる規定を包含するは其の當時の經濟的狀態の反影に外ならぬ。此種の相互依存關係は自から時間的關係を通じて因果關係として表現せられる所がある。後者は長期的傾向として觀取せられるに對し前者は短期的現象として考察せられる。

第五章は「技術と經濟組織」との關係に於いて著者は前述した様な立場からして其の相互依存關係を説述するのであつて、尙此の種の依存關係は自然や民族のそれに於いて見た様な靜態的均衡ではなくして動態的均衡をなしてゐることを附言する。著者は先づ技術と經濟とを區別し、ゴットルに從つて經濟的領域に於ける技術は本質的經濟問題即ち制限せられたる資源を用ひて我々の欲望を充さんとする問題に對して效果ある解決を我々に保證することを目的とする。従つて技術の問題は有形財・無形財の物質的生產を如何にするかであつて、經濟心理的局面を持つて居

らぬ。同一時期に於いて同一の生産額を擧ぐべき技術は多數に存する。其中何れを實際に用うべきかは經濟的考慮に據つて選擇せられる外はない。而して資本家的生産に於いては他の事情の等しい限り最少の費用のものに對して選擇が行はれる。されば選擇し採用せられたる技術と技術的智識とは區別せらるべきである。前者の意義に於ける技術が經濟を決定するものでないことは當然である。併し後者即ちより廣汎なる技術がこれをなしてゐるとすることは歴史的事實を一見すると正當なる如くに見へる。著者は更に推考を進めたる結果技術的智識の發展そのものの條件となるものを其の當時の社會・經濟的心理に見出し、ここに兩者の相互依存的關係を撞き止める。資本主義社會の社會・經濟的心理は合理主義であつて、それは如何なる社會に於けるよりも技術の發達に對して好良なる條件をなす。然して資本主義社會に於けるこの種の相互依存關係は互に他の發展を促進する條件となる所謂動態的形式をとるものである。(一〇四—一二六頁)

ワルラスの數學的均衡は與件(欲望・生産力)が變動せぬ限りそれは固定的均衡を維持するものである。而してワルラスに依れば、與件の變動は單に其の量的變動に外ならないのであつて均衡の質には何等の變動もない。換言すれば與件の間には一定の對立關係が維持せられる。ブスケ教授はこの均衡に對して時間的要素を加うる時は、一定の對立關係は不斷に攪亂せられて均衡そのものの質的相差を來すと見る。攪亂的要素は內的・外的の二に分れる。後者は前述の様な新技術の發明や土地の變動や新教理の流布等である。後者は直接欲望と生産力との間に存する對立關係の破壊である。生産力或は資源と人口とが一定の對立關係を維持すると見る限り人口の問題は止揚せられる。事實ワルラスは之れに觸れて居らぬ。然るに教授は其の非對立關係を認める。故に教授に於いて新に此の問題を取上げて人口學的均衡に論及する事が必要となつた。マルサスに於ては資源或は生活資料の數量と人口數との間

には一定の割合が存するとせられてゐた。然るに生活資料は彼に於いて頗る曖昧であり、それは當然富の分配と欲望とを考察することなくしては正當に思料せられない。富の分配は父母の性殖性と子女の數を基礎として行はれるのではなくして、各人の勞働と資産によつて規制せられる。故にマルサスによる均衡の最高理論より實際人口は遙に少なるべきである。又富裕にして然も性殖力なき者のみが子女育成の爲めに其の所得の一部分を用ひざるばかりではない。それは全社會のあらゆる階梯に於いて觀取せられる事實である。例へ一社會に於ける勞働力とか富の分配とが認識せられたとしても、其の社會の欲望嗜好を顧みざる限り人口の水準を解決する事は出來ない。(一三〇—一六二頁)

されば教授に於いて人口學的均衡を齎すべき與件は一、性殖力二、資源の分配三、欲求であつて之等の與件の對立關係を決定すべき諸機構はA人間の意志に影響することなき自然的機構、それはa.生活資料の不足b.衛生の缺如等c.其他種々の原因に基く死亡、B人間意志の介在する機構即ちa.老衰・殺兒・墮胎、b.結婚の制限、c.結婚による生産の制限即ち性殖力の減殺これである。然してマルサス以後に於てBの機構成は層一層重大となり直接的となりつつある事は看過し得ない。(一七一—一八五頁)要するにマルサスに於ける $P = f(R, B, N)$ (註一)は教授に於いて $P = f(R, B, N)$ の關係に置き換へられたのである。(註一、人口(P)は生活資料(S)と共に變化し、Sは時間(t)と比例して増加す。故にPは時間と比例して増加す。)

結局するに「本書の諸章は理論と實際に對して捧げられたものである。而して其の理論はワルラスが何等我々に語らなかつたものであり、語る必要のないものであつた。それは均衡の等式が單なる經濟的事實のみを反影するが爲めに經濟社會の物理的・人種的・社會的・法律的・技術的・人口的・基礎に關連せるものである。」(一八九頁)然して此等

の諸基礎は經濟組織と因果關係に立つものではなくして相互依存關係に立つ事が證明せられ、此の見解から取扱はれたものである。

最近經濟文獻

〔理論經濟學〕

- * 經濟學新講、第五卷、變動の理論) 高田保馬著 菊判五三四頁
* 上級無産者教程、マルクス主義レーニン主義經濟學入門 山本三吾譯編 四六判二八二頁 叢文閣
* マルクス主義經濟學教程 橋本弘毅譯 菊判四九二頁……社
* 經濟學確證(實生活篇) 岡本利吉著 四六判三三九頁……社
* 農業恐慌、第一輯、農業問題研究會譯編 四六判二四二頁……社
* 世界經濟恐慌の經過と現勢 平野常治編 文明 協會
* 日本の獨占資本主義金融資本の恐慌對策 猪俣津南雄著 四六判三四二頁 南北 書院
マルクスの蓄積理論と固定資本(改造、一四卷六號、昭和七、六、三六―五一頁) 織戸登代子
シムムペーターの貨幣本質觀と貨幣數量說(内外研究、五卷二號、昭和七、五、一三―四二頁) 岡 橋 保
貨幣理論に於ける主觀學說―ウキ―ザ―貨幣理論―(經濟學論集、二卷五號、昭和七、五、三八―七二頁) 荒木光太郎

最近經濟文獻

- カール・マックス・サール「貨幣政策と經濟理論」(經濟學論集、二卷五號、昭和七、五、一三七―一四三頁) 大河内一男
ハイエック「ケインズの貨幣理論」(經濟學論集、二卷五號、昭和七、五、一四六―一五四頁) 安井 琢磨
* Böhm-Bawerk: Grundzüge der Theorie des wirtschaftlichen Güterwerts. (1886) London: London School of Economics 1932. 150 S. (Reprints of scarce tracts.)
* Commission syndicale de Belgique. Les Crises économiques. Bruxelles, 1931. 329 p.
* Essai sur l'universalisme économique Othmar Spann. Préface G. L. Duprat. Paris, 1931. 340 p.
Fauvel, A. L. Principles of economics. New York, 1932. 522 p.
* Greidanus, T.: The value of money. Monetary theories and an exposition of the yield theory of the value of money. London, 1932. 372 p.
* Gumpert, J.: Die Agrarkrise in den Vereinigten Staaten. Leipzig, 1931. 182 S.
* Jathar, G. B. and Beri, S. G.: Indian economics. Vol. 2. London, Oxford Univ. Pr. 1932.
* Murry, J. M.: The fallacy of economics. London, 1932. 35 p.

一五五 (一二七五)